

## 唐代の女流詩人

黒 羽 英 男

明人胡應麟曾て唐詩を評して曰く、「甚だしいかな、詩の唐に盛んなるや。その体は則ち三・四・五言、六・七雜言、樂府、歌行、近体、絶句、備わらざるなく、その格は則ち高卑、遠近、濃淡、浅深、巨細、精粗、巧拙、強弱、具わらざるなく、その調は則ち飄逸、渾雄、沈深、博大、綺麗、幽間、新奇、猥瑣、詣らざるなく、その人は則ち帝王、将相、朝士、布衣、童子、婦人、縉流、羽客、預らざるなし」と。

由来中国の詩体は、周の四言より起り、漸を逐つて発達し、兩漢の樂府、魏晉六朝の古詩となり、唐代に至つて律詩及び絶句となり、詩の發展遂に最高峯に達した觀がある。

そもそも唐詩をしてかくの如く隆盛に至らしめた所以は、實に時代背景が詩の發展に適合して、これを培育したからである。即ち高祖や太宗が、群雄を平定して、政權を統一し、基業を鞏固にし、典章制度を改善し、南北文化の交流融和を図り、思想感情の滲透混和に思いを致した結果、文學においても亦燦然たる光彩を放つに至つた。しかのみ

ならず、唐代の君主何れも皆文芸を愛好したが、就中、太宗は文学館を開いて文人を雲集せしめ、玄宗又科挙の制を起し、詩賦を以て士を取ったが為めに、詩賦は即ち仕途に志すものの必修科目となつてしまつた。利禄声誉の在る所、勧めずして自ら聚る。況んや上の好む所、下自ら風を成すをや。然らば一詩能く爵禄を釣るべく、一吟猶以て名声を馳するに足る。月桂必ずしも攀じ難からずとすれば、人情誰しも、我こそ一番清輝を揚げて、世間を駭かしてやろうという野心も起る。剩え、天宝以後、内乱による流離困苦の体験は、坐ろに人生の哀別離苦を思わしめ、悠久無限の自然と対比して、如何に詩囊を豊かならしめたことであろうか。唐詩の盛んなる決して偶然ではない。

而して一旦昌平盛世の時を迎うるや、上下挙つて安居楽業の余、宴飲遊楽を愛好したのは、極めて自然の現象に属する。或は酒酣にして嘯詠し、或は山に登り水に臨んで唱酬し、凡そ文墨に通ずるものは、「瓊筵を開きて花に坐し、羽觴を飛ばして月に酔ふ」の心境を愛し、「佳作有らずんば何ぞ雅懷を申べん」の感を深くしたことであろう。上は帝王・卿相より下は三教・九流乃至閨門の内に至るまで、相率いて詩酒を以て歡を為し、詠歌を以て楽しみとした唐代三百六十年、全唐詩に録する所、作者実に二千二百余人、詩四万八千九百余首の多数に上る。

その昔、周公が礼を制定した時以来、女は専ら家庭に籠り、文化的事業に参与することが出来ず、「境を出でて人を弔せず」とか、「無才を以て徳と為す」とか謂われて来た女流も、ここに至つては、時代風氣の光を浴び、精神の自由を享受し、久しく胸裏に鬱積醞釀する所、発して万朶の華となつた。或は幸を離宮に望み、或は寵を後掖に妬み、花雨愁月、幽怨を素翰に写し、或は従軍千里、寒閨孤棲して、落葉秋緒を悲しみ、或は情人遠く去つて音信絶え、関山飛魂の情を裁したのものもあり、亦以てその盛を窺うに足りる。我が平安朝時代に女流の詞才が輩出したように、時勢風氣の化する所、能くこの翠帳紅閨の流を駆つて、その隆昌を致さしめたと謂つてよい。蓋し漢魏の詩賦は猶我が万葉時代の和歌の如く、而して唐詩は正に古今時代の和歌である。

さわれ、唐代における女流詩人の数は、当代詩人総数の二十分の一に過ぎない。清の康熙四十二年（一七〇三）の勅撰にかかる全唐詩所録の女流詩人中、宮人十名、名媛三十余、姬妾侍兒十余人、妓女二十余、女道士四人、その外は事蹟の詳かでない婦女子である。その中で、花蕊夫人・薛濤・魚玄機の三人のみは、それぞれ詩集が一巻ずつあるが、この三人を除けば、五首以上採録されたもの僅かに五六人、その外は総べて一・二首或は三・四首あるに過ぎない。今、これら女流の作五百余首の中から数首を選んで、鑑賞の資に供しよう。固よりこれ崑山の片玉、桂林の一枝に過ぎない。

### 天宝の宮人

洛苑梧葉の上に題す

旧寵秋扇を悲しみ、 新恩早春に寄す。

聊か題す一片の葉、 将て寄す接流の人。

又題す

一葉詩を題して禁城を出だす、 誰人か酬和して独り情を含む。自ら嗟く波中の葉に及かざること、蕩漾春に乗じ次を取って行く。

この兩首に関しては、世にもあわれな逸話がある。天宝の末年、洛苑の宮女で、詩を梧葉の上に題し、それを御溝の水に浮かべて流したものがあつた。人木石にあらず、誰か坐して花容の萎み行くを願うものがある。さわれ身は深宮に在り、翼無くして飛ぶよしもない。せめてはこの遣る瀬ない心情を、みかわ水、波のまにまに流れ行く梧葉に題して、ものあわれを知る人に伝えたい一念からであつたらう。その後、同様なことを幾度か繰り返している中

に、阿漕が浦に曳く網も、度重なれば人目にとまり、やがて上聞に達して、その宮女は無残や追放されたという。

### 徳宗の宮人

一たび深宮の裏に入りしより、春を見得るに由無し。

詩を題す花葉の上、

寄与す接流の人。

この詩の作者は奉恩院王才人の養女、鳳児である。貞元中、進士賈全虚というものが、御溝に浮いている紅葉を見つけ、取り上げて見ると、詩句を題してある。全虚は坐ろに作者を想望して、低徊去るに忍びず、徘徊踟躕している間に、不幸にして警備の役人に捕えられてしまった。やがてこの事が上聞に達し、詮議の結果、鳳児の所作と判明すると、徳宗は全虚を召して、これに金吾衛兵曹を授け、遂に妻わずに鳳児を以てせられたという。これは又運のよい男である。

### 宣宗の宮人

姓は韓。盧偃が科挙に応試した時、偶々御溝のほとりで一片の紅葉を拾った。見れば絶句一首が記されている。曰く、

流水何ぞ太<sup>はな</sup>だ急なる、深宮尽日閑なり。

殷勤紅葉に謝す、好し去って人間に到れ。

彼はこの紅葉をそっと手箱に収めて置いた。その後宮人達が宮仕えを退くに及び、偃は端なくも韓氏を妻に迎えることとなった。韓氏は手箱の中の紅葉を見るや、嘆嗟久しうして曰く、「思わざりき当時の偶題、郎君これを得たら

んとは」と。

花蕊夫人 姓は徐（一説に費）。幼にして文を能くし、最も宮詞に長じた。蜀主孟昶もうしやうの寵幸を得て、号を花蕊夫人と賜わったが、宋の太祖が後蜀を平定した時、俘虜となった夫人を召し見て、彼の詩作を徴せられるや、口占一絶、

君王城上降旗を豎つ、  
妾は深宮に在り那ぞ知ることを得ん。

十四万人齊しく甲を解く、更に無し一個の是れ男兒。

以てその気概を見るべきである。後、故夫を忘れざるの故を以て長く宋室に仕えるを屑しとせず、遂に死を賜わった。しかしこの女丈夫にも、

殿前の宮女総べて織腰、  
初めて乗騎を学び怯にして又嬌。

馬に上り得てより纔かに走らしめんと欲し、幾回か鞚くわを抛って鞍橋を抱く。

蕙炷香銷して燭影残す、  
御衣熏り尽きて輒こうたけなわち更闌なり。

婦来困頓紅帳に眠る、  
一枕の西風夢裏寒し。

の如き、繊細可憐な作もある。

### 名媛の詩

七才の女子 南海の人。武后曾て召し見て、兄を送るの一首を求むるや、少女は即座に次の一絶をものした。

別路雲初めて起り、  
離亭葉正に飛ぶ。

嗟く所人雁に異なり、  
一行と作なって帰らざるを。

張立本の女 年少未だ書を読まず、忽ち自ら左の詩を吟ず。立本口ずさむに随つてこれを録したと伝えられる。

危冠広袖楚宮の装、 閑庭に独歩して夜涼を逐う。

自ら玉簪を把つて砌竹を敲く、 清歌一曲月霜の如し。

薛媛 濠梁の人。南楚材の妻。

写真夫に寄す

下さんと欲す丹青の筆、

先ず拈る宝鏡寒し。

已に驚く顔索寞たるに、

漸く覚ゆ鬢の凋残せることを。

涙眼描き将て易く、

愁腸写し出すこと難し。

恐らくは君渾べて忘卻せんことを、 時に画図を展べて看よ。

孫氏 進士孟昌期の妻。詩を善くし、常に夫に代つて作る。一日忽ちいう、「才思は婦人の事に非ず」と。遂にその集を焚く。今、三首の一を録する。

琴を聞く

玉指朱弦軋つて復清む、

湘妃の愁怨最も聴き難し。

初めは颯颯として涼風の動くかと疑い、又蕭蕭として暮雨の零るに似たり。近づけば流泉の碧嶂に来るに比い、

遠ざかれば元鶴の青冥より下るが如し。 夜深く弾ずること罷んで惆悵するに堪えたり、 露は叢蘭を湿して月

庭に満つ。

夜深くして琴声止み、滿庭月色の裏にあり、叢蘭露を帯べるを瞥見するもの、誰か空虚冷漠の感無きを得よう。

開元年間のこと、詩人王昌齡・高適・王之渙の三人が連れ立って、或る旗亭で会飲した。偶々来合わせた梨園の伶官たちも、別席に歌妓を呼んで宴を張っていた。それと見た三人が私かにいうよう、「我が輩詩名を擅ほしまにしているが、お互にまだ優劣が定まらない。幸いこの席上、あの伶官たちの謳う詩を聞いて、甲乙を決めようではないか。」「よかろう」ということになった。やがて一人の伶官が、昌齡の「寒雨連江夜入吳、平明送客楚山孤。洛陽親友如相問、一片冰心在玉壺。」と、もう一絶の二首を謳い終ると、次の伶官は高適の絶句「開篋淚沾臆、見君前日書。夜台何寂寞、猶是子雲居。」と吟じた。この時、之渙が口を切った、「今度はあの可愛い妓女の謡う番だが、もしその謡が僕の作でなかったら、僕は生涯君たちと互角に争う望みをすてよう。そのかわり、僕の詩であつたら、君たち二人、揃って僕に頭を下げる」。暫くして妓女が謡い出したのは、果して王之渙の作「黄河遠上白雲間、一片孤城万仞山。羌笛何須怨楊柳、春風不度玉門關」の一絶であつた。「どうだい、僕のいうことに間違いは無かるうが……」。この旧説は必ずしも、そのまま信じられないにしても、当年の妓女が、争つて高名な詩人の佳作を愛唱し、名士も亦、自作の詩章を謡わせて高興とした証左とするに足りる。随つて、勢の馴致する所、妓女の中にも詩を能くするものが決して尠くなかつたのである。

### 妓女の詩

関盼盼 徐州の妓。張建封に寵愛されたが、張の死後は、孤閨を守つて、独り彭城の燕子楼に幽棲すること十余年。白居易、詩を贈つてその死を諷した。盼盼詩を得て泣いて曰く、「妾死する能わざるにあらず、唯我が公に従死の妾有つて、生前の佳名を汚すに至らんことを恐るるのみ。」と。乃ち白居易の詩に和して曰く、

自ら空楼を守って恨眉を斂む、形は同じ春後牡丹の枝。

舎人は会せず人の深意を、あやし訝み道う泉台去って随わずと。

やがて旬日食を断って死んだ。

盼盼が白居易の深意を察知して、この挙に出たことは言うまでもないが、「自守空楼斂恨眉、形同春後牡丹枝」、堅貞かくの如くにして、掃眉塗粉、誰のためにか施すべき。老いさらばいたかんばせを、何時までさらして長らえよう。彼の女は守るを必せずして自ら守り、燕子楼は空しかるべからずして竟に空し。嗚呼この地、この人。

唐代女流詩人の中、才情兼ね備え、永く後世の詩人文士をして賞揚措く能わざらしめた、尚一個の妓女を拉し来て、本稿の筆を擱こう。

薛濤 字は洪度。本は長安の良家の女で、地方官であった父の任地蜀に寓した。濤は八九才にして已に声律を解し、父の死後、笄するに及び、益々詩名が高まった。時に韋臯、蜀を鎮し、毎に濤を召して、酒に侍し、詩を作らしめた。僚佐皆これが為めに襟を正したという。一年後、臯は長安の都に帰任したので、奏請して濤を校書郎に推そうとしたが、妨げられて、そのことは沙汰止みとなった。

ここにおいて、濤は幕府に出入し、凡そ十一代の鎮護に歴事して知遇を得、詩名いよいよ藉甚を加えた。彼の女の往来唱和する所、元稹・白居易・牛僧孺・杜牧・劉禹錫等を始め、尽く当時の詩人や名流であった。卒する年七十五。全唐詩に収むる所、薛濤詩一卷凡そ八十八首。

### 春望の詞

花開けども同ともに賞せず、  
花落つれども同ともに悲しまず。



問わんと欲す相思う処、 花開き花落つる時。

友人を送る

水国の蒹葭夜霜有り、 月は寒し山色共に蒼蒼。

誰か言う千里今夕よりと、 離恨杳として関塞の如く長し。

竹郎廟に題す

竹郎廟前古木多し、 夕陽沉沉山更に緑なり。

何れの処ぞ江村笛声有り、 声声尽くこれ迎郎の曲。

郷を思う

峨嵋山水油の如し、 憐れむ我が心繫がざる舟に同じきを。

何れの日か片帆錦浦を離れ、 櫂声齊しく唱えて中流に発せん。

これを要するに、唐代女流詩人の説き来り説き去る所、畢竟個人的哀怨離恨の情のみ、時に精麗秀逸、清新高遠の趣が無いわけではないが、雄渾博大の気魄、慷慨激越の情感に至っては、殆どこれを見ることが出来ない。これ一に環境の制限より来る見聞経験の狭小鄙陋に因るもので、決して彼等が卓越した才華、非凡な稟賦を欠いていたためはあるまい。もしそれ今日彼等を九泉の下に起して、生を動揺乱離、風雲万変の現代に享けしめたならば、果してどのような名篇佳什を成し得たであろうか。

(二月二十六日夜)